



2000年代以降の日本社会における新しいコミュニケーションスキル：1974年～2019年の会話ハウトゥ本における「話力」をめぐる助言の変容から考察する

桶川, 泰

(Citation)

年報Promis, 1(1):3-13

(Issue Date)

2023-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482485>



〈論文〉

2000 年代以降の日本社会における 新しいコミュニケーションスキル —1974 年～ 2019 年の会話ハウトゥ本における 「話力」をめぐる助言の変容から考察する—

New Communication Skills in Japanese Society since the 2000s:
Analyzing the Change of Advices of “Speaking Skills” in
Conversational How-To Books Published between 1974 and 2019

桶川 泰

Yasushi OKEGAWA

I はじめに

「生きる力」「人間力」「学力」「就業能力」「社会人基礎能力」「就職基礎能力」など、現代社会では、様々な組織・団体によって新しい能力が提唱されている。コミュニケーション能力は、そうした新しい能力の構成要素に含み込まれていることが多く、新しい能力の代表的な能力と言われている。

厚生労働省が2004年に提起した「就職基礎能力」の1つにもコミュニケーション能力（「意思疎通」「協調性」「自己表現能力」）が含まれている（厚生労働省 2004）。経済産業省が2006年に発表した「社会人基礎力」の「チームで働く力」では、自分の意見をわかりやすく伝える「発信力」や相手の意見を丁寧に聞く「傾聴力」など、コミュニケーションに関連する能力が含まれている（経済産業省 2006）。また文化庁は、コミュニケーション能力の必要性が力説される社会的影響を受け、「コミュニケーションの在り方」・「言葉遣い」について検討を行っている。その結果、「分かり合うための言語コミュニケーション」のためには、「自分の言葉や言葉の使い方を鍛える」「語彙を身に付け使いこなす」「考えや気持ちを必要に応じてきちんと言葉にする」必要性を挙げている（文化審議会国語分科会 2018）。

こうしたコミュニケーション能力を代表とした新しい能力を獲得することが煽られる社会的背景として、本田由紀は現代社会がハイパーメリトクラシー社会であり、社会的地位の獲得のために、既存の（学力といった）「近代能力」に加え、「ポスト近代能力」を習得する必要性が生じていることを論じている（本田 2005）。松下佳代は、新しい能力が提唱される社会的背景として、グローバルな知識経営の下での労働力要請を挙げている。労働経済学者であるロバート・ライシュの議論を引用し、グローバルな知識経済のもとではルーティン生産サービス、対人サービス、シンボル分析的サービスという職業区分が登場するけれども、どの職業でも対人関係能力が必要とされるようになることを指摘している。例えば、ルーティン生産サービスでは、職場の人間と協調性を保つ最低限の対人スキルが

必要とされ、対人サービスでは客に好感を与える振舞が必要となり、シンボル分析的サービスでは、多種多様な人間とチームを組んで仕事をする能力が求められている（松下 2010: 7-8）。

一方中村高康は、「現代社会において新しい能力が必要である」という議論を否定し、新しい能力の必要性が力説される社会的背景として「メリトクラシーの再帰性」という概念を提示している。例えば、過去において、コミュニケーション能力や人間力は本当に評価されていなかったのか、ハイパーメリトクラシーと呼びたくなるような能力評価は広汎に共有されていなかったのか（中村 2018: 31）という疑問を提示している。また、多様な職業には各々求められる能力が異なっており、コミュニケーション能力のように共通する能力の土台を措定することには無理があることを論じている（中村 2018: 44）。

中村が指摘するように、多様な団体・組織に提唱された「新しい能力」は、各々その内実が抽象的であり、2000 年代以前に果たしてその能力を人々は求めていなかったのか、以前の時代に比べて如何なる点で重要になったのか不明瞭な側面が大きい。

そのため本稿では、現代日本社会において如何なるスキルが必要なのかを提案するよりも、会話ハウトゥ本を分析資料として、多くの人に需要されたコミュニケーションスキルは如何に変容しているのかを明らかにする。もしくは、2000 年代以降に如何なる新しいスキルが望まれるようになったのかを明らかにすることを目的とする。ただしコミュニケーション能力自体、抽象的な概念であり、コミュニケーション能力の中でもある特定の能力に焦点を合わせ、その能力に付随するスキルが如何に変容したのかを考察していく必要があるだろう。本稿では、コミュニケーション能力の中でも話す能力に焦点を合わせる。また、人々が需要する話力のスキルは如何に変容したのかについて明らかにするために「売れてる」「話題になった」会話ハウトゥ本を分析資料とする。

II 分析資料となる会話ハウトゥ本と会話ハウトゥ本の概観

2.1 分析資料の収集の仕方と考察対象となる助言

分析資料となる会話ハウトゥ本は、1978 年～2020 年までの『出版指標年報』の「書籍の出版傾向」で紹介されている会話ハウトゥ本である。『出版指標年報』の「書籍の出版傾向」では、分野ごとに「売れてる本」「話題になった本」「出版傾向のある本」などが紹介されている。会話ハウトゥ本も、「書籍の出版傾向」の中の語学分野に 1978 年から紹介されるようになっていく。また、「ビジネス書」分野でも 1994 年から載せられている。本稿では、この「語学分野」「ビジネス分野」に紹介されている会話ハウトゥ本を分析資料とした。¹

分析資料数は 1974 年～1979 年に出版された本が 7 冊、1980 年～1989 年が 19 冊、1990 年～1999 年が 9 冊、2000 年～2009 年が 28 冊、2010 年～2019 年が 38 冊であり、総計で 101 冊となる。

『現代社会学事典』（2012 年、弘文堂）によれば、コミュニケーションは「人間が対人関係のなかで互いの意思、感情、思考を伝達しあい、理解しあうこと」（『現代社会学事典』2012: 453）を意味しており、「情報やメッセージの発信者、受信者、そして情報そのものという 3 つの要素に分けて考えることができ」（『現代社会学事典』2012: 453）。

1 「語学分野」「ビジネス分野」において、「話し方本」として紹介された本、タイトルに「話し方」「話術」等のタイトルが付けられた本を収集している。ただし一冊全てが言葉遣い・敬語の使い方のみが紹介されている本、一対大多数を想定しているスピーチ本も分析資料から外している。

本稿においては「情報・メッセージの発信の仕方」をめぐる助言を考察対象としている。「情報・メッセージの発信の仕方」という観点から会話ハウトゥ本の助言を分類すると以下のように区分される。まず、「情報・メッセージ」を発信するために必要な表現能力の培い方、具体的には言語化のために必要となる「適切なボキャブラリー運用」「ボキャブラリーの増やし方」、言語化能力を培うためのトレーニング方法といった助言が存在する。次いで、発信する「情報・メッセージ」を相手に分かりやすく・明確に伝える方法（説明）を載せた助言、さらに「情報・メッセージ」の内容を相手に同意させ、その内容に従って行動させる方法（説得）をめぐる助言がある。また、どのような「情報・メッセージ」を伝えるかによって、「謝罪」「お礼の伝え方」「怒り方」「注意の仕方」「面白い冗談の作り方」「自己開示・自己情報の伝達の仕方」など多様な助言を想定することができる。

本稿では「情報・メッセージの発信の仕方」をめぐる助言でも、「表現能力の培い方」「説明の仕方」「説得の仕方」に焦点を当てている。「お礼の伝え方」「謝罪の仕方」「怒り方」「注意の仕方」「面白い冗談の作り方」など、ある特定の「情報・メッセージ」の発信の仕方を載せたハウトゥ本は冊数が限られたものになる。

ただし「自己開示・自己呈示」の仕方をめぐる助言に関しては、載せているハウトゥ本が一定頻度で存在していたため、考察対象に加えた。自己をいかに他者に提示していくのかは多くの人々の関心の的であるからと考えられる。また自己開示・自己呈示を行うことによって、相手と打ち解け、話しやすい環境になる心理学的効果があることはよく知られている。言うならば「自己開示・自己呈示」の仕方を考察対象とすることによって、親密な対人コミュニケーションをめぐる助言に如何なる変容があったのかを考察することができるという研究上の利点がある。

中村は産業構造の転換（第一次産業から第二次産業、サービスを中心とした第三次産業への転換）によって、現代日本社会にコミュニケーション能力が必要になってきたという議論を否定していた。ただし、恋人や親友などの親密な関係性の形成・維持にコミュニケーション能力が必要になっているという議論も存在する。例えば山田昌弘は、個人化の進展により、関係性の自由化が進行することによって、コミュニケーション能力がないものが選択されずに絆から排除されるという問題を生み出しはじめていることを指摘している（山田 2001: 7）。一方土井隆義は、個人化の進展に伴い如何なるコミュニケーションの技術が必要になっているのかについて言及している。土井によれば、価値観が多元化していくことによって、互いの理解可能性を前提としない人間関係を築いていく技術が必要となり、そうした技術として互いの対立の回避を最優先とし、スムーズに人間関係を営む「優しい関係」が生まれたことを論じている（土井 2008）。

2.2 該当助言を載せたハウトゥ本の冊数と会話ハウトゥ本の執筆者の社会的属性

それでは、各々の年代の会話ハウトゥ本に「説明」「説得」「表現能力」「自己開示・自己呈示」をめぐるスキルを載せたハウトゥ本は幾冊あるのだろうか。ただし、あるハウトゥ本に「説明」「説得」「表現能力」「自己開示・自己呈示」をめぐるスキルが載せられているかどうかをカウントしていくと、「明確に判断できるケース」と「判定しにくいケース」が生じてくる。

「明確に判断できるケース」のみをカウントすると、「説明の仕方」を載せたハウトゥ本は 38 冊、「説得の仕方」を載せたハウトゥ本は 51 冊、「表現能力の培い方」を載せたハウトゥ本は 30 冊であった。また自己開示・自己呈示をめぐる助言では好感の持てる（嫌われない・親密になることができる）自己開示・自己呈示の仕方と会話が弾むための自己開示・自己呈示の仕方が紹介されている。好感の持

たれる自己開示・自己呈示を載せたハウトゥ本は32冊、会話が弾むための自己開示・自己呈示を載せたハウトゥ本は13冊あった。明確に判断できるケースとしてタイトル・章・節・小見出しに「説明」「説得」「表現」「自己開示・自己呈示」と関連するキーワードが付けられ、さらにそれぞれの能力の培い方、コミュニケーションの取り方について助言を載せたハウトゥ本をカウントした²。年代ごとにそれぞれのハウトゥ本が載せられた冊数を整理したのが表1である。

会話ハウトゥ本の執筆者の社会的属性についても確認しておこう。会話ハウトゥ本の執筆者が経験している・経験したことのある仕事・職業を整理したものが表2である³。

表1 各年代の「説明」「説得」「表現能力」「自己開示・自己呈示」をめぐる助言の冊数

(単位＝冊数)

	説明	説得	表現能力	好感が持たれる自己開示・自己提示	会話が弾む自己開示・自己呈示
1974年～1979年(5)	1	3	1	1	0
1980年～1989年(21)	8	9	9	3	2
1990年～1999年(9)	4	7	2	2	1
2000年～2009年(31)	12	14	11	11	3
2010年～2019年(35)	13	18	7	15	7
総計(101)	38	51	30	32	13

表2 会話ハウトゥ本執筆者が経験したことのある(経験している)職業・仕事

(単位＝人数)

アナウンサー・キャスター・司会・ラジオのパーソナリティ	話し方研究所・話し方教室など	大学教員(非常勤教員含む)	セラピスト・精神科医・心理学者	新聞社に所属(新聞記者・新聞編集者など)	放送作家、プロデューサー	その他(左記のどれにも当てはまらない)
17	17	15	7	4	4	21

会話ハウトゥ本の執筆者は1つの職業・仕事のみを経験しているのではなく、複数の職業経験・仕事経験を経てきたことが多い。その中でも最も経験されている職業・仕事が「アナウンサー・司会・

2 具体的には、「説明」では、章・節・小見出しに「説明」「分かりやすい話」「伝わる」という単語が付けられ、その頁に「明確かつ分かりやすい話し方」が載せられているハウトゥ本をカウントした。「説得」では、「説得」「伝わる」「納得」という単語が付けられ、説得の(相手に同意させる・納得させる)ための話し方が載せられているハウトゥ本をカウントした。「表現能力」では「描写」「伝わる」「言葉」「ボキャブラリー」などの単語が付けられ、言語化能力の培い方、さらにはそうした言語化のために必要な「適切なボキャブラリー運用」「ボキャブラリーの増やし方」をめぐる助言が載せられているハウトゥ本をカウントした。「自己開示・自己呈示」では「自己(自己紹介、自己アピール、私などの自己に関する一人称)」、さらには自己開示・自己呈示と関連する「失敗談」「わがまま」「自己顕示」「自己主張」「プライド」などの単語が付けられている章・節・小見出しも含めている。

3 心理学の大学教員のように、一人の著者が複数のカテゴリーに所属する・所属の経験がある場合は、それぞれにカウンティングしている。また福田健や鈴木健二、齋藤孝のように「売れてる本」「話題になった本」を幾冊も執筆している著者もいる。

ラジオのパーソナリティ・キャスター」である(17名)。アナウンサーという職種では、発声や滑舌・間のとり方など、言葉を正しく伝える技術が必要とされるのみではなく、自分の考えや気持ち・感覚、周囲の映像・情景などを言語化する表現能力も必要とされる。次いで、話し方研究所や話し方教室のように、企業で務める人々のためのコミュニケーション能力の向上を目的とした研修や一般の人向けに人間関係が向上するためのコミュニケーションの取り方の講座を請け負っている人たちが執筆者になることが多い(17名)。

年代ごとの会話ハウトゥ本の冊数を執筆者の社会的属性ごとに整理したのが表3である⁴。1970・80年代までは「アナウンサー・キャスター司会・ラジオのパーソナリティ」が多く、2000年代以降は、話し方研究所や話し方教室に所属する人が多くなる。また大学教員(非常勤教員含む)を経験した人・経験している人も多くなることを確認することができる。

ただし大学教員の中には、研究者というよりも「コミュニケーション能力」が高いと見做される職業・仕事に就き、大学のコミュニケーション教育を任された人も一定数含まれている。一方、セラピストや心理学者、精神科医といった専門的職業の人たちは時代を通して7名と少ない結果となっている。

表3 職業・仕事経験者ごとの各年代の執筆冊数
(単位＝冊数)

	アナウンサー・キャスター司会・ラジオのパーソナリティ	話し方研究所・話し方教室など	大学教員(非常勤教員含む)	セラピスト・精神科医・心理学者	新聞社に所属(新聞記者・新聞編集者など)	放送作家、プロデューサー	その他(左記のどれにも当てはまらない)
1974～1979年	1	1	1	0	1	0	3
1980～1989年	12	4	2	1	0	1	1
1990～1999年	1	4	1	0	0	0	3
2000～2009年	2	9	10	2	3	0	6
2010～2019年	6	10	7	4	1	3	11
総計	22	28	21	7	5	4	24

Ⅲ 会話ハウトゥ本における説明・説得・表現能力をめぐる助言の様態

3.1 説明・説得をめぐる助言の一般的傾向

それでは会話ハウトゥ本において、「説明の仕方(明確かつ分かりやすい話し方)」「説得の仕方」「表現能力の培い方」をめぐる助言がされているだろうか。まず、説明の仕方(明確かつ分かりやすい話し方)をめぐる助言を分類すると、「トピックの並べ方」(「結論から話す」・「概要→詳細の順番で話す」)、「内容の具体さ」「適切なボキャブラリー運用」に区分される。

4 表2と同じく、複数のカテゴリーを有する著者がハウトゥ本を1冊執筆した場合、それぞれのカテゴリーにカウントしている。また同一人物が数冊執筆した場合それぞれカウントしている。例えば、大学教員である齋藤孝が2000年～2009年に2冊執筆している場合、2000年代に大学教員に2冊カウントしている。

内容を具体的にする方法としては、「分かりやすいたとえ話」「身近に感じるエピソード」を使用することや5what2hを意識して話すことが助言されている。ボキャブラリー運用としては、難しい専門用語を使わない・分かりやすいボキャブラリーを選択することや自分の意志や状況を的確に表現できる言葉を選択することが助言されている。

会話ハウトゥ本の中で最も多く言及されている助言は「結論から話す」・「概要→詳細の順番で話す」という「トピックの並べ方」である。具体的なトレーニング法としては、新聞から情報の整理の仕方（見出しから本文の整理の仕方、情報のブロックの分け方）を学ぶといった方法が助言されている（小川1983: 42-3）。また映画や小説などを読み要約するという練習法も提案されている。百田尚樹は感動した映画や小説、漫画のストーリーを他人に聞かせること、特に物語を解体し、一本の筋を見つけ、枝葉をくっつけていく（例えば映画ならば物語の全体像をつかみ、主要なキャラクター、印象的なシーンを加えていく）作業を行うことを提案している（百田2016: 127-31）。

「トピックの並べ方」「内容の具体さ」「適切なボキャブラリー運用」以外にも、「1つの話の区切りを短くする」「短い文を接続詞でつないでいく」必要性、「相手に合わせた話し方をする（「相手の不明な点を理解する」「理解度を確認して次に映る」「相手に伝わる言葉で言い換える」）」必要性、「自分は本当に伝えたい内容を理解しているのか」「相手に対して果たして本当に伝わっているのか」を自問する必要性も助言されている。

一方、説得的な話し方では「明確かつ分かりやすい話し方」が必要とされている。内容が具体的なものになるように、「身近なエピソードを入れる」「データ・数値の裏付けや反論を含めた客観的な話し方」の必要性、適切なボキャブラリーを選択する必要性が助言されている。もっとも、情報・メッセージの内容を相手に同意させ、その内容に従って行動させるには、「明確かつ分かりやすい話し方」だけでなく、「相手の心理に対する働きかけ」も必要となる。そのため会話ハウトゥ本では、お互いのメリットになることの強調や相手の自尊感情・特別感情・共感感情への働きかけ、相手の拒否を防ぐ働きかけ方（いくつかの選択肢から選ばせる、最初に小さなノーを言わせる、相手の負担を軽くする伝え方をする）なども助言されている。

図1 説明をめぐる助言の構成のされ方

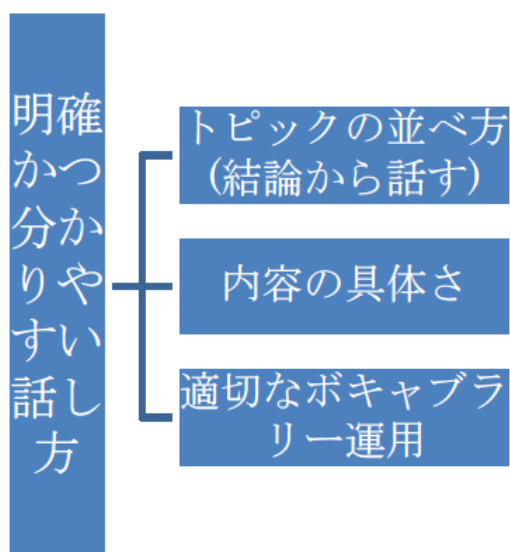
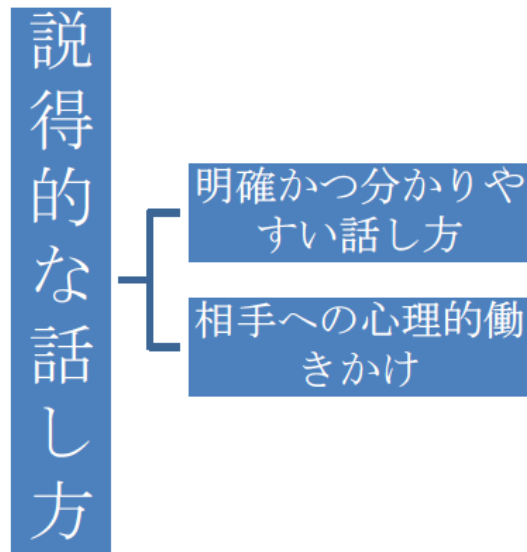


図2 説得をめぐる助言の構成のされ方

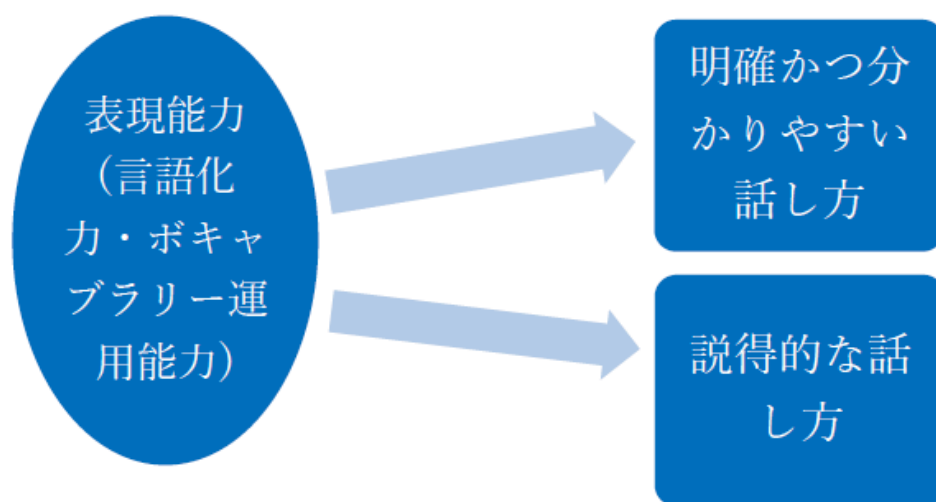


3.2 表現能力をめぐる助言の一般的傾向

表現能力は上述で確認したように、「明確かつ分かりやすい話し方」「説得的話し方」を遂行する上で必要な能力として言及されていた。そもそも情報・メッセージを発信するためには言語化する能力が必要であり、「話すのが苦手な人には2つのタイプがあります。『言葉（ボキャブラリー）が少ない人』と『言葉を使うのが怖い人』です」（和田 2005: 82）と指摘されているように、話下手の原因として言及されることも多い。表現能力を培うための具体的な方法として、「新しい言葉を積極的に覚え、使う意識を持つ」必要性や「ありきたりの表現を使わずに自分なりの表現を探す」積み重ねの重要性が助言されている。また目の前に映る情景・情報を言語化する即時描写のトレーニングも提案されている。他にも、読書の有用性が説かれることが多く、多様な方法が提案されている。その一例には以下のようなものがある。

まず、文学小説をたくさん読んでみることです。特に美しい表現の文章、きれいな会話を交わしている小説などを読んで、豊かな表現の仕方を覚えましょう（金井 1989: 124）

図3 表現能力と説明能力・説得能力の関係性



相手に「言葉」を「映像」で伝えることができる人は、そうでない人よりも、明らかにボキャが多いのです。いま目の前の夕焼けを、どうすれば、それを見ていない相手に伝えられるのか——自分の見たこと、感じたこと、思いを伝えるには、やはり、それを表現する言葉を知ること、そして、それを口に出してみることが大切です（和田 2005:129-30）

「朗読」によってボキャブラリーが増える……このボキャブラリー、私の経験からいうと、黙読するだけではあまり身につかないものです。読書家が必ずしも饒舌だったり話し上手だったりするわけではないからです。やはり「黙読」ではなく「音読」→「朗読」が脳に影響を与えているのだと思うのです（魚住 2015: 126-7）

3.3 説明・説得・表現能力をめぐる助言の時系列的な変容

それではこれらの助言は1970年・80年代から2000年代を通して如何なる変容があったのだろうか。実を言うと「説明の仕方」「説得の仕方」「表現能力の培い方」をめぐる助言の変容が生じたとは言いつづらなかった。

佐々木圭一『伝え方が9割』（2013年、ダイヤモンド社）のように、説得のためのスキルを読者に分かりやすく伝える本も登場している。これまでの会話ハウトゥ本では、「相手のプライドをくすぐることが納得させにくい話を納得させるコツ」「説得に勝ち負けはない。双方の利益にならなければ説得とならない」など、「説得には～の心理的働きかけ・～の心構えが必要である」という助言に止まっていた。それに対して、佐々木圭一の『伝え方が9割』では「じぶんの頭の中をそのままコトバにしない→相手の頭の中を想像する→相手のメリットと一致する願いをつくる」など、相手の心理に働きかけるための必要なステップも解説している。同じく木暮太一『伝え方の教科書』（2013年、WAVE出版）においても相手に分かりやすく伝えるために必要なステップを解説している。ただし必要なステップ毎に分かりやすく解説していくというハウトゥ本は2000年代においても少数に限られている。

表現能力に関してはどうか。1970年代・1980年代の会話ハウトゥ本でも表現能力を培うための様々なトレーニング方法が提起されている。前項で、ボキャブラリーを増やすためには「新しい言葉を積極的に覚え、使う意識を持つ」必要性や「ありきたりの表現を使わずに自分なりの表現を探す」積み重ねの重要性が助言されていることを確認した。そうした助言は70年代・80年代から存在し続けている。

最低一日一語は新しい言葉を使いましょう……知っている言葉の数と話せる言葉の数では確実に差があるはずですからね……つまり、活字で知っている言葉でも、必ず一度口に出して使ってみないことには、話し言葉の語彙の中には組み込まれないわけです（久米 1979: 54-5）

たとえば、新聞をすみずみまで読むとか、ちょっと目先を変えて男性週刊誌に目を通してみるとか、そういうことからボキャブラリー獲得作戦を始めてはどうでしょう。ざっと眼を通すだけでも、見知らぬ言葉に出会うはずですよ。そうしたら、めんどくさがらずに調べること。どんな意味があって、どんな時に使われる言葉なのか、しっかり自分のものにしてしまうのです。そしてごちなくともかまわないから、日常の会話の中で使ってみるのです（田村 1982: 142）

また即時描写のトレーニングも70年代・80年代から提起されており、具体的なトレーニング法が紹介されている。

ラッシュの車内で、もみ合う人々の表情や動作を観察しながら、小声で描写してみるのもよい……電車を降りて帰宅するまでの間でも、何か1つテーマをきめ、歩きながらまとめてみる（森瀬 1983: 196）

こうした即時描写は周囲の映像・情景などを言語化する表現能力が必要な「アナウンサー・司会・ラジオのパーソナリティ・キャスター」から助言されることが多い。また、1974年～1989年までハ

ウトゥ本 26 冊中 13 冊の著者が「アナウンサー・司会・ラジオのパーソナリティ・キャスター」の社会的属性を経験している。

IV 会話ハウトゥ本における自己開示・自己呈示をめぐる助言の様態

前述したように、自己開示・自己呈示を行うことによって、相手と打ち解け、話しやすい環境を形成できる効果があることはよく知られている。会話ハウトゥ本においても「上辺だけを飾る態度を捨ててありのままの自分であること」「失敗談を打ち明けること」の重要性が力説されている。また、自慢話や独りよがり・自己中心的な話、自己陶醉の自己主張など、嫌われる自己開示・自己呈示の仕方とも紹介されている。さらに「姓名を名乗るだけでは不十分」「微笑んで、大きな声で」「さわやかに」など、好感の持たれる自己紹介の仕方が様々に紹介されている。

こうした「自慢話・独りよがり・自己中心的な話をする」と嫌われ、失敗談・秘密を打ち明けると好感をもたれる」という助言は 1970 年代から 2010 年代まで一貫して載せられている。もっとも自己開示・自己呈示をめぐる助言に時系列的な変化が存在しないわけではない。

まず 2000 年代になると、「自己とは如何なる人間なのか」を相手に伝えることを目的にするよりも、「会話にいい流れが生まれる」「会話が弾む話題を提供できる」ことを目的にして自己開示・自己呈示をコントロールする必要性が力説されるようになる。

例えば安田正は、会話の序盤に自己開示を行うことが基本であることを指摘しつつ『この人は人間的に大丈夫なのか?』と思われかねないような失敗談、相手が引くくらいの経験談、身の上話は NG です」(安田 2015: 28)と助言している。さらに「……何気ないひと言で場の空気をよくしたり、相手が気になるような情報をあえて入れておくことによって、会話を広げるきっかけ」(安田 2015: 29)をつくることを目的にして自己開示を行う必要性を論じている。渡辺由佳もまた相手が受け答えできる範囲を見極める必要性の重要性を指摘し、「自虐ネタで卑下しすぎない」「『自虐』は相手が楽しく聞ける範囲を見極める」必要性を説いている(渡辺 2016: 194)。

また「相手と打ち解け、話しやすい環境を作る」効果が自己開示・自己呈示にあるということは、「自己開示・自己呈示を行わないことは相手と打ち解ける意欲がない」という解釈も提示されていく。

例えばスピーキングエッセイ編『図解でよくわかる上手な話し方が身につく法』では、「ご趣味は何ですか」という相手からの質問に対して「ない」という返事をするとは、会話を断絶させるという指摘をしている。そのため「常に『自分の話せること』を探しておいてください」という助言も続けて行っている(スピーキングエッセイ 2002: 22)。

相手の質問に対して「はい」「いいえ」のみで答えること(自己情報を付け加えないこと)は会話する意欲がないという助言は 2000 年代の会話ハウトゥ本で多く載せられるようになっていく。それに加え、自己情報を伝えることができるように常に自己の話せることを探す必要性も提示されている。

野口敏は「どんなに些細な会話であっても、人はあなたの『気持ち』を知りたがっています」「『事実』の後にちょっとした『気持ち』をプラスする」(野口 2009: 59-61)という上述で確認した「ちょっとした自己開示」の有用性を説いている。それに加え、「よくよく考えてみれば、どんな人でも 1 日のうちで、ちょっとだけムツとしたことや、小さな喜びを感じたことはあるはずです。問題はそのわずかな感情をつかまえきれているかどうかにあります」(野口 2009: 63-4)と、自己の感情を言語化できる意識性をもつ必要性を論じている。

V おわりに

現代社会では、様々な組織・団体によって新しい能力が提唱されている。本田はそうした新しい能力を獲得することが煽られる社会的背景としてハイパーメリトクラシー社会である点に求めた。松下は、グローバルな知識経営の下での労働力要請を挙げていた。一方中村は、「現代社会において新しい能力が必要である」という議論を否定し、新しい能力の必要性が力説される社会的背景として「メリトクラシーの再帰性」という概念を提示していた。

こうした様々な見解が浮上する背景には、具体的に新しい能力とは何なのか、そうした能力は2000年代以前に求められていなかったのかというブラックボックスが存在しているからである。そこで、本稿では、1974年～2019年までのよく「売れてる」「話題になった」会話ハウトゥ本において、「説明」「説得」「表現能力」「自己開示・自己呈示」をめぐる助言のあり様は如何に変容したのかを考察していくことによって、具体的に如何なるコミュニケーションスキルが2000年代に求められるようになったのかを明らかにすることを試みた。

考察の結果、説明・説得の仕方、表現能力をめぐる助言は1970年代・1980年代から助言のバリエーションが出そろっていた。一方、「会話が弾む自己開示・自己呈示」のあり方については2000年代以降に助言の変容を見出すことができた。その変容は自己開示・自己呈示のコントロール化、自己開示・自己呈示の意識性の向上の2点にあったと言える。

2000年代の日本社会では「KY」という言葉が流行したように、「場の空気を敏感に察知してコミュニケーションを取り合う」スキルが高度化したと言われている。1節で言及した土井隆義は空気を読み合い、気遣い合うコミュニケーションが必要とされる社会的背景として価値の多元化や既存の所属集団の崩壊と言った個人化、経済活動の競争化を挙げている（土井 2008）。また森真一は、現代社会の対人関係に高度な自己観察・自己コントロールが必要とされるようになってきていることを指摘し、現代人の気遣い合う関係性を「人格崇拝規範の高度化という社会学的理論から考察している（森 2000）。2000年代以降の「売れてる」「話題になった」会話ハウトゥ本では、自己情報の伝達よりも「会話にいい流れが生まれる」「会話が弾む話題を提供できる」ことを目的にして、自己開示・自己呈示を行う（自己コントロールの）必要性が力説されていた。相手が受け答えに窮する自己情報を伝えることの否定性（新しい「気遣いコミュニケーション」の必要性）も力説されるようになってきている。また会話のキャッチボールをスムーズに行うために自己観察の意識性の向上も説かれている。

「ハイパーメリトクラシーと呼ばれる能力評価が昔から広汎に共有されていなかったのか」という疑問が残るように「場の空気を敏感に察知してコミュニケーションを取り合う」スキルも昔から存在していなかったのかという疑問は残るだろう。広井良典は身内の過剰な濃密な関係を内に「閉じこもった関係性」と規定し、日本社会の関係性が「閉じこもった関係性」であることを論じている。また和辻哲郎が昭和4年に同様な関係性を描いていたことを指摘している（広井 2009）。

そうした点で「売れてる」「話題になった」会話ハウトゥ本から2000年代以降に「空気を敏感に察知しながらコミュニケーションを取り合う」ための新しい会話スキルが出現していることを明らかにした本稿には一定の意義がある。

本稿では『現代社会学事典』（2012年、弘文堂）に紹介されているコミュニケーションの3要素の中でも「情報・メッセージの発信の仕方」に焦点を当てて、会話ハウトゥ本の助言を分析・考察した。「情報の作り方（共通の話題の作り方）」をめぐる助言についても2000年代以降の会話ハウトゥ本では『相

手が投げた僅かな会話のボール』や『身近から事柄』から共通の話題を作るスキル」が発達している点を（桶川 2023）で明らかにしている。「情報・メッセージの受信の仕方」をめぐる助言に 2000 年代以降に如何なる変容があったのかについても別稿にて発表したい。

参考文献

文化審議会国語分科会 2018「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」(https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/09/a1401904_03.pdf)。

土井隆義 2008『友だち地獄——『空気を読む』世代のサバイバル』筑摩書房。

広井良典 2009『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房。

本田由紀 2005『多元化する「能力」と日本社会——ハイパーメリトクラシー化のなかで』NTT 出版

株式会社。

経済産業省 2006「社会人基礎力に関する研究会——『中間取りまとめ』」(https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf)。

厚生労働省 2004「就職に向かってがんばる若年者を支援する“YES- プログラム”を展開 若年者就職基礎能力の修得の目安」(<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/04/h0427-2c.html>)。

松下佳代 2010「〈新しい能力〉概念と教育——その背景と系譜」、松下佳代編『〈新しい能力〉は教育を変えるか——学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房。

森真一 2000『自己コントロールの檻——感情マネジメント社会の現実』講談社。

中村高康 2018『暴走する能力主義』ちくま書房。

桶川泰 2023「個人化社会におけるコミュニケーションスキル——1974 年～ 2019 年までの会話ハウトゥ本を分析資料として」『社会文化研究』25 号、社会文化学会。

山田昌弘 2001『家族というリスク』勁草書房。

引用した分析資料

久米宏 1979『知的センスおしゃれ会話入門』青春出版社。

田村美寿々 1982『面白おしゃべり術』青春出版社。

小川宏 1983『話し上手になる魅力的会話術』主婦の友社。

森瀬茂 1983『話し言葉のルールブック——誠意だけで話は通じない』こう書房。

金井良子 1989『女の魅力は「話し方」しだい——「あいさつ」から「敬語」まで、しらずしらずに身につく本』大和出版。

スピーキングエッセイ編 2002『図解でよくわかる上手な話し方が身につく法』明日香出版社。

和田裕美 2005『和田裕美の人に好かれる話し方——愛されキャラで人生が変わる！』大和書房。

野口敏 2009『誰とでも 15 分以上会話がとぎれない！話し方 66 のルール』すばる舎。

木暮太一 2013『伝え方の教科書』WAVE 出版。

佐々木圭一 2013『伝え方が 9 割』ダイヤモンド社。

魚住りえ 2015『たった 1 日で声まで良くなる話し方の教科書』東洋経済新報社。

安田正 2015『超一流の雑談』文響社。

百田尚樹 2016『雑談力』PHP 研究所。

渡辺由佳 2016『好かれる人が絶対しないモノの言い方』日本実業出版社。